

井伊直弼著 『茶湯一会集』 釈文

①

此書は茶湯一会の始終、主客の心得を委敷あらはす也。故に題号を一会集といふ。猶、一会に深き主意あり。抑、茶湯の交会は一期一会といひて、たとへば幾度おなじ主客交会するとも、今日の

会にふたゝびかへらざる事を思へば、実に我一世一度の会也。去るにより、主人は万事に心を配り、聊も觥末なきやう深切実意を尽し、客にも此会に又逢ひがたき事を弁へ、亭主の趣向何事つもおろかならぬを

感心し、実意を以て交るべき也。是を一期一会といふ。必々主客とも等閑には一服をも催すまじき筈の事、

即、一会集の極意なり。流祖石州も、人の茶湯にならぬ様にせよと、常々被示も此事なるを可知。扱、茶湯の趣向には、大抵、茶会毎に同物を不出、飾りをかへ、手前を工夫し、只管客にめづらしがらせんとのみ心懸るは、嗜茶の

②

輩の常にして、さる事なれど、器物・飾り等かはれば、自然と主客の気持もかはり、挨拶の都合にもよき道理にて、実は仕やすきより、多くは如斯なせども、茶事

得道の上には、強ち品を取かへ、飾り・手前等かはらざれば茶湯の趣向ならずといふ謂、曾て無き事也。南坊

宗啓が利休の懷石日記を書抜き、利休へ見せ與書を乞ひし時、利休こたへに、年中毎会の内、品替たるばかりを御書拔候事不心得候。面上に御思慮可承候。呉々

相替る事なく、日々同事計の内、心の働は引替へく、如何様にも可有候。所作・飾り・置合の珍敷事は不快会にて候と云々。誠に尤成教訓、いつも同物をもちひ、飾り・手前まで尋常にして、心を引かへ改めもてなす事、茶道の大本也。

但し、此一会集にあらはす茶湯一通は、朝会・正午会等の正風体の茶会を以て、始終の心得を記す也。右の外、夜込・夜咄・雨中・雪中などの如き変格の交会数多あるは別巻にあつめ、出すを見て知るべし。

(この後、八十七丁余 中略)

③ 独座観念

一主客とも余情残心を催し、退出の挨拶終れば、客も露地を出るに高声に咄さず、静にあて見かへり出行は、亭主は猶更のこと、客の見へざるまでも見送る也。扱、中潜り・猿戸その外、戸・障子など早々立などいたすは不興千万、

一日の饗応も無になる事なれば、決て客の帰路見えずとも、取かた付急ぐべからず。いかに心静に茶席に立もどり、此時、にじり上りより這入り、炉前に独座して、今暫く御咄も有べきに、もはや何方まで可被参哉、今日一期一会済て、ふたゝびかへらざる事を観念し、或は独服をもちいたす事、是一会極意の習なり。此時寂寥として、打語ふものとは釜一口のみにして、外に物なし。誠に自得せざればいたりがたき境界なり。

(この後、七丁余 略)

※ルビは新かなづかいを適用

『茶湯一会集』について

井伊直弼が三十一歳(1845)の頃から書き始められ、安政五年(1858)に完成した。原本は井伊家に伝えられ、本稿の原文は直弼自筆の印影本(井伊家史料保存会、昭和五十年刊)による。その内容は、近世後期の遊芸化した茶の湯に、「一期一会」「独座観念」という概念を提唱し、千利休に立ち帰ろうとする視点で書かれたものである。激動の幕末にあつて、静寂の極致のような茶室での心を、時の為政者である直弼が残していることは興味深い。なお、先人の書『山上宗二記』には「一期に一度の参会の様に」と説かれており、大口樵翁の『交会平点規範』には「独座観念」の言葉が記されている。

※千利休(1592)生—天正十九年(1591)に自刃し死去。

※山上宗二(1544)生—天正十八年(1590)没。堺の町衆。

・茶人。千利休に二十年間、茶の湯を学んだ高弟。秀吉に仕えていたが、秀吉の怒りを買ひ追放され、浪人となる。高野山に逃れていた時、自筆の秘伝書『山上宗二記』を著した(天正十六年(1588)頃)。その後「小田原征伐」の際、秀吉に再会するが再び秀吉の怒りを買ひ、打ち首にされた。

※大口樵翁(1689)生—明和元年(1764)没。江戸中期の大阪の茶人。石州流の茶の湯を学び、独自に大口派を開いた。

井伊直弼について

文化十二年(1815)生—万延元年(1860)に桜田門外で暗殺され死去。近江彦根藩第十六代藩主、幕末の老練としての井伊直弼の事績については略するが、茶人としての直弼は、「埋木舎」に部屋住みの若い頃から茶の湯を学び、のち片桐宗猿を師として石州流に通じ、宗観と号した。

茶の湯についての豆知識

①茶の湯(茶道)は季節により、「炉」(新暦十一月頃～翌年

四月頃)と「風炉」(新暦五月頃～十月頃)とを使い分けている。炉は茶室の畳の一部(一尺四寸(約四十二センチ)四方が標準)を切り、そこに炉壇を設け、茶釜を懸ける。本稿の「独座観念」はその茶室でのこと。

②本来の茶会(茶事)は、一人の亭主(ホスト)が数人(最少の場合は一人)の客(ゲスト)を招き、おおむね四時間、炭・懷石・濃茶・薄茶でもてなす。昼正午頃から行われることが多いが、季節・趣向により朝茶・夜咄(冬季に日没から)・夜込(暁の茶事ともいう、冬の未明から)等も行われる。

註

(一)石州(慶長十年(1605)生—延宝元年(1673)没。大和郡山藩第二代藩主・片桐貞昌。片桐且元の弟・片桐貞隆の嫡子。寛永元年(1624)石見守に叙任され、以後、「石州」と呼ばれるようになる。その後、普請奉行を務め、土木行政・作事にあたった。慶安元年(1648)第三代将軍・家光の命により、徳川将軍家の名物道具「柳営御物」の分類・整理を行った。のち、第四代将軍・家綱の時、御道具奉行を務め、また、「石州流三百箇条」を上進し、柳営茶道の指南役となり、茶道石州流の祖となった。

(二)南坊宗啓(生没年不詳。茶道の秘伝書『南坊録』の筆者とされる。利休の弟子で、堺の(南宗寺の塔頭)集雲庵の二世住持とされる人物だが、その正体は分かっていない。また、『南坊録』の内容については多くの疑問点が見え、現在では、利休没後百年目(元禄三年(1690))に、利休を仰ぎ尊ぶ後世の茶人が編纂した仮託の偽書といわれている。

(三)正風体(普通の標準的な形式)。

(四)露地(茶室に付属する茶庭を「露地」と呼ぶが、茶室に遠い「外露地」と、茶室に近い「内露地」に分かれる。

(五)中潜り(「外露地」と「内露地」の境に建てる中門の一種。そこに扉を開け、くぐって出入りするもの)。

(六)猿戸(露地にある小さな門の片開きの戸(木戸または竹の枝折戸))。